

法華寺旧境内の調査

―第526次・第532次

1 第526次調査

はじめに

本調査は、集合住宅建設にともなう発掘調査である。調査区は、平城京東二坊坊間路に該当する。調査区は東西3m、南北10m、調査期間は2014年3月6日から2014年3月18日までである。

基本層序

調査区の層位は、表土（厚さ10cm）の下、造成土（20cm）、畑の旧耕作土（10cm前後）、地山（黄褐色粘質土）の順である。黄褐色粘質土の上面が遺構検出面となり、遺構は標高70.00m付近に展開する。

検出遺構

遺構は、掘立柱塀1条、南北溝2条、柱穴1基、土坑1基、ピット群などからなる。

掘立柱塀SA10597 径0.25～0.4mを測る円形柱掘方の南北方向の掘立柱塀で、計6間分を検出した。柱間寸法は1.4m等間、残存する深さは5～10cm。出土遺物がなく、帰属する年代については不明だが、埋土の特徴などから

中世以降の所産だろう。なお、SA10597周辺には、ほかにも規模や形状が類似した小柱穴が展開しており、調査区およびその周辺に小規模な塀や建物などがほかにも存在した可能性が高い。

東二坊坊間路東側溝SD10595 東二坊坊間路東側溝と推定できる南北方向の素掘溝である。調査区内で長さ10m、幅0.2～0.6m分を検出した。溝の西肩を調査区東端（Y-18.039付近）で検出し、深さ0.4m以上。調査終了後、調査区外でおこなった立会調査において、SD10595の東肩も検出し、これとあわせると東西幅2m、深さ45cmとなる。これは、調査区の北で実施した第202-12次調査において検出した東二坊坊間路東側溝（SD01）の幅とも一致する（『1989年 平城概報』）。出土遺物は、古代から中世にかけての瓦片が中心で、東二坊坊間路東側溝が古代から中世にかけて継続的に水路として利用されていたと考えられる。

南北溝SD10596 南北4m以上、幅1.2m以上の素掘溝。埋土が畑耕作土と酷似することなどから、耕作関連の溝と推定できる。掘削された時期は近現代であろう。

柱穴SP10598 調査区東側（X-144.960、Y-18.039付近）で検出した。SD10595の肩部上面から西側へ柱掘方を掘削した掘立柱穴であり、柱掘方は東西0.6m、南北0.8m、

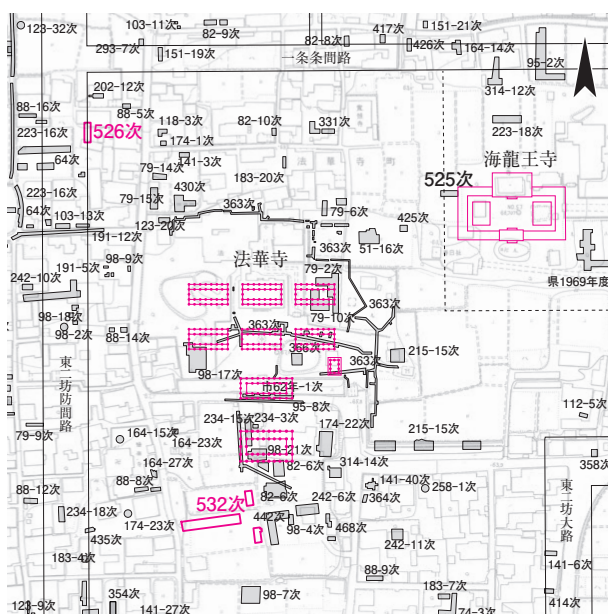


図261 第526次・第532次調査区位置図 1:4000

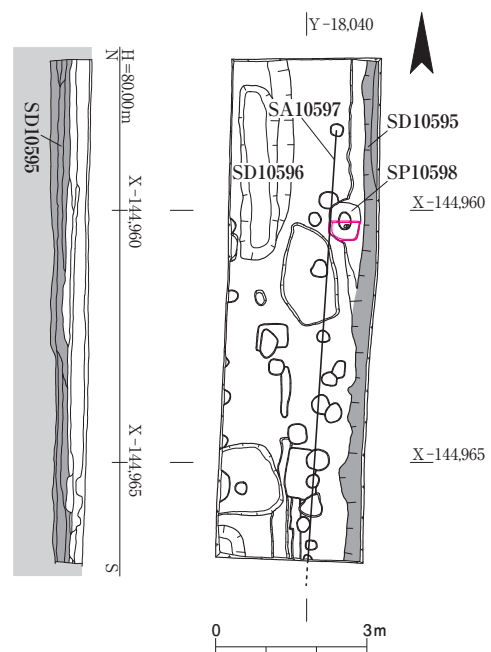


図262 第526次調査区遺構図・土層図 1:150

深さ0.2mを測る。位置からみて、SD10595にともなう遺構と推定できるが、出土遺物がないため、時期は特定できない。

出土遺物

出土遺物は、東二坊坊間路東側溝SD10595から主に出土し、丸瓦や平瓦片が大半を占め、土器片が少量混じる。遺物の総量は、古代から中世の丸瓦・平瓦が遺物整理用コンテナ5箱分、土師器片・須恵器片と埴輪片などの土器類が1箱分である。

まとめ

本調査では、東二坊坊間路東側溝と考えられる南北溝SD10595を検出し、調査区付近で幅2m、深さ0.45mを測ること、出土した遺物からこの南北溝は、奈良時代から中世に至るまでの長期間使用されていたことなどが判明した。

(青木 敬)

2 第532次調査

はじめに

本調査は道路および住宅建設にともなう事前調査である。調査地は法華寺旧境内にあたり、東側の隣接地ではこれまで第82-6次・第442次調査がおこなわれており、掘立柱建物や鑄造関連遺構などが検出されている(『年報1974』、『紀要2009』)。調査区は東西31m、南北5mのA区、東西3.5m、南北8mのB区・C区の3ヵ所を設定した。調査面積は合計209㎡。調査期間は2014年4月22日から5月30日までである。

基本層序

基本層序は調査地が東西に広いため場所により異なる。A区西部では地表から表土、灰色砂質土、地山(灰色粗砂)。A区中央部では地表から表土、灰色砂質土、黄白色砂質土、地山(灰白色粗砂)。A区東部では表土、黒褐色土、地山(白色粗砂)。遺構検出面は黄白色砂質土および地山である。B区では地表から表土、黄灰色砂質土、黄褐色砂質土、地山(黄褐色粗砂)。C区では地表から表土、灰色砂質土、地山(黄褐色シルト)の順である。遺構検出面は基本的に地山上面で、A区中央部では黄白色砂質土上面である。遺構検出面の標高は64.3m前後で、A区中央部から西南隅にむかってやや落ち込む。

検出遺構

A区で近世の土坑2基、C区で奈良時代の掘立柱建物

1棟・掘立柱塀1条がある。B区では顕著な遺構が検出されなかった(図263)。

掘立柱建物SB9205 C区中央付近で検出した東西棟掘立柱建物。柱穴2基を検出し、東側の柱穴は東西1.0m以上、南北1.2m、残存する深さは0.7m、西側の柱穴は東西0.6m以上、南北1.0mである。柱間寸法は約3.0m。第442次調査で検出した奈良時代の掘立柱建物と柱筋が揃い、一連の遺構と考えられる。第442次調査とあわせると桁行4間以上の建物となる。

掘立柱塀SA9215 C区北部で検出した東西掘立柱塀。柱穴1基を検出し、東西0.7m、南北1.1m、残存する深さは15cmである。第442次調査で検出した掘立柱塀と一連のものとみられる。柱間寸法は約3.0mで、あわせて3間分となる。

土坑SK10481 A区中央南壁際で検出したすり鉢状の土坑。東西1.7m、南北1.1m、残存する深さは20cm。近世の陶磁器片や瓦片が多量に廃棄されていた。

瓦溜SU10480 A区東南隅で検出した瓦を廃棄した土坑。東西6.6m、南北3.0m以上の隅丸方形で、残存する深さは0.7m。土坑内の埋土は何層かに細分が可能であるが、遺物からは時期差はみられず、すべて近世以降に属する。

(庄田慎矢)

出土遺物

瓦埴類 本調査区で出土した瓦埴類は表35に示した。以下、軒瓦の主要なものを報告する(図264)。1は奈良時代前半期の6285Aで法華寺前身遺構(光明子邸)に使用されたと考えられる瓦である。2～4は中世の巴瓦である。5の6714A、6の6716Aは、法華寺創建時の所用瓦である。9、10は平安時代、7、8、11は中世に降る。7～9は法華寺境内から出土例があり、8と同文の瓦は海龍王寺、不退寺、秋篠寺からも出土している。11は内区右上に範傷があり、興福寺の鎌倉時代再建瓦の範を切り縮めたものである。

このほか、奈良時代の施釉磚が多く出土している。緑釉の水波文磚4点、二彩の刻線文磚4点、単彩の無文磚7点が出土した。図265は残存長12.0cm、幅7.0cm、厚み4.2cmで、上面にヘラで水波文を描き、下面には「条十八」のヘラ書きがある。釉薬は上面のみに施す。ほか3点の水波文磚の下面にもそれぞれ「九」、「卅」、「八」と読めるヘラ書きがある。これらの施釉磚については本紀要の



図263 第532次調査遺構図 1 : 250

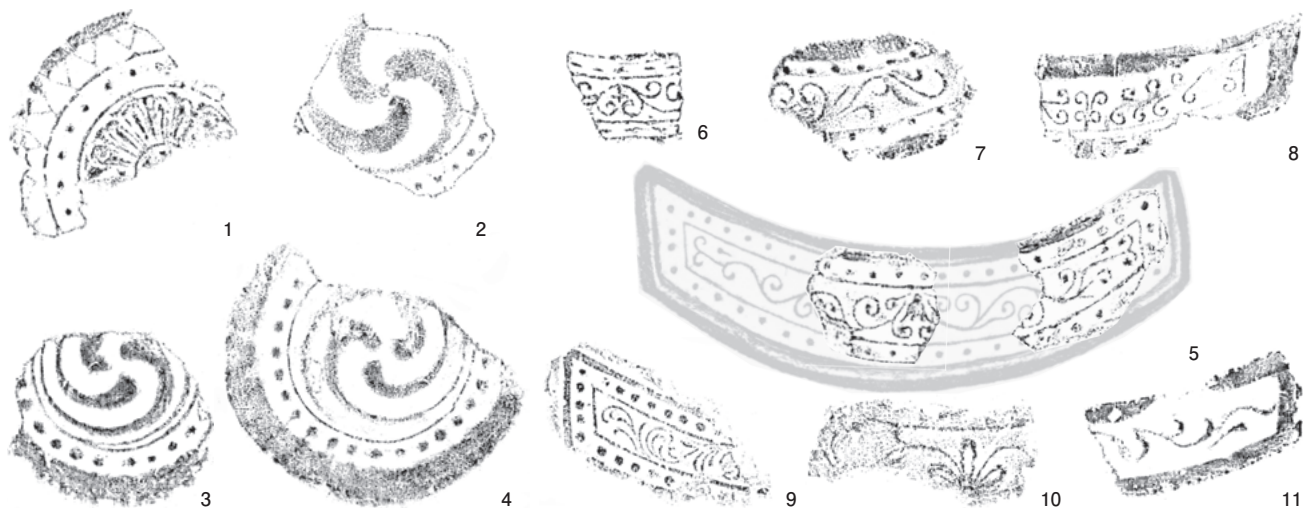


図264 第532次調査出土軒瓦 1 : 4

表35 第532次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6285	A	2	6714	A	1	丸瓦 (施釉)	1
6320	A	1	6716	A	1	平瓦 (施釉)	1
巴 (鎌倉)	3		古代	7		平瓦 (刻印)	1
(中世)	33		平安	2		平瓦 (タタキ)	3
(近世)	2		鎌倉	3		平瓦 (ヘラ書)	3
古代	4		中世	27		隅切平瓦	1
鎌倉	1		近世	2		ケラバ (顔ナシ)	1
中世	19		時代不明	10		鬼瓦 (中世)	2
時代不明	16					鬼瓦	2
						鬼瓦?	1
			軒平瓦計	53		面戸瓦	4
			軒棧瓦			面戸瓦?	1
			時代不明	2		雁振瓦	4
			軒棧瓦計	2		隅木蓋	3
						磚 (施釉)	11
						水波文磚	4
						五輪塔	1
						用途不明道具瓦	3
軒丸瓦計	81					その他計	47
丸瓦			平瓦			凝灰岩	
重量	196.114kg		540.348kg			1.555kg	1.118kg
点数	1713		6827			4	12



図265 第532次調査出土水波文磚 1 : 4

58頁で考察する。本調査区が法華寺金堂の南西に位置することから、今回出土した瓦磚は同寺の主要伽藍で使用されていた可能性が高い。(今井晃樹)

土器 整理用コンテナ7箱分の土器が出土した。奈良時代の須恵器・土師器は少量で、大半は近世の瓦質土器・土師器である。SK10481・SU10480からは14～15世紀代の土師器皿・羽釜、瓦質搗鉢が出土した。

(小田裕樹)

おわりに

今回の調査では、C区で第442次調査で確認された掘立柱建物・塀が西に続く様相を確認した。一方、A・B区では法華寺伽藍と関わる建物等の遺構は検出されなかった。本調査区の遺構検出面標高は第82～6次・第442次調査より約1m低く、本調査区では近現代の造成により遺構面が大きく削平されていることが考えられる。

(庄田・番 光)